

大井川下流域の段丘・牧の原台地（地学散歩(54)）

著者	橋本 隆夫
雑誌名	静岡地学
巻	74
ページ	i-iii
発行年	1996-11-23
出版者	静岡県地学会
URL	http://doi.org/10.14945/00025202

大井川下流域の段丘・牧の原台地

橋本隆夫*

地学散歩(54)

大井川下流の右岸には第三系（瀬戸川層群、倉真層群、相良層群、掛川層群）を基盤にして、第四系が不整合に被っている。その堆積物は下位より坂部原礫層（高根山、高尾山、坂部原など牧の原台地より一段高く突き出た丘陵台地、中期更新世）、古谷泥層（牧の原台地の南部、相良周辺に分布する内湾浅海堆積物、後期更新世下末吉海進期、12万年前）、牧の原礫層（旧大井川の河床堆積物、後期更新世、10万年前）および色尾礫層（旧大井川の河床堆積物、更新世最後期の低位段丘）として分布し、牧の原台地などの広大な河岸段丘を形成している（図1）。これらの関係は牧の原台地北端の居林付近より南へ一望できる（図1の①、写真1）。

牧の原台地は金谷の北方（標高300m）から徐々に高度を減じ、牧の原付近より3つに分岐して、東へは権現原（100m）の東陵と相良の寺河原（100m）の東南陵および御前崎（50m）の南陵へと続き（図1）、堆積面は比木付近を除けばよく保たれているが、御前崎台地は、プレートの沈み込みに反発して繰り返される地震による隆起で半島先端の方が高くなっている（写真3）。

牧の原礫層は砂岩を主とする旧大井川の河床堆積物で、各所で観察できる（写真2）。礫径の変化を各露頭での大型礫10個の平均でみると、金谷70cm、比木20cm（現大井川河口も20cm）、御前崎5cmで南に小さくなる。比木から御前崎の台地では花崗岩や片麻岩を含む天竜川系の1~2cmの扁平な円礫で海浜成相を示す（写真4）ので御前崎台地は海岸段丘である。

礫層の厚さは概して陵の中軸で厚く縁辺で薄く、第三系のかつての谷間を埋めて堆積したもので、現在の地形は当時より逆転している。

古谷泥層は薄い基底礫岩を伴って主に相良層群を不整合に被う（写真5）。牧の原礫層とは堆積環境を異にした整合の関係にある。層相や植物化石、貝化石の水平および垂直方向への変化を追跡すると古環境の移り変わりが推定できて興味深いフィールドである（写真6）。

しかし、最近茶畑の改植や道路工事等で良好な露頭が少なくなったのは残念である。

なお、交通はJR金谷駅を起点にバス等の利用もできるが本数も少なく、自家用車での巡検を勧めたい。

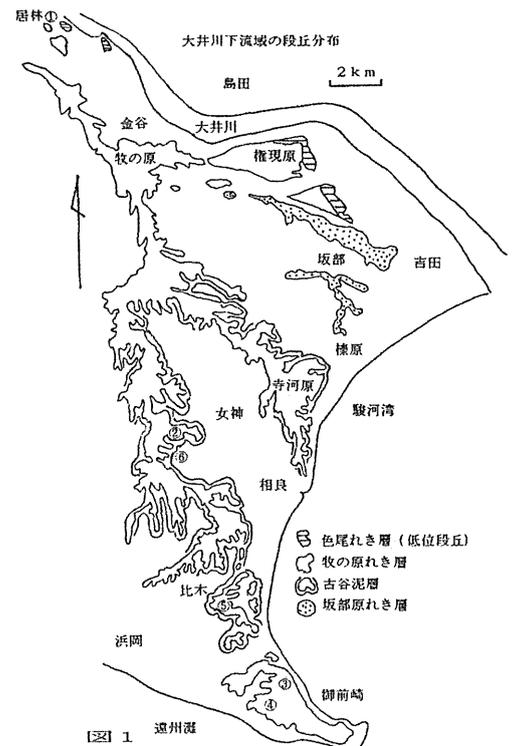


図1 遠州灘

* 静岡県立静岡南高等学校



写真1. 大井川右岸の河岸段丘
起伏のある遠景が高尾山、その
手前の平坦面が牧の原台地。
中景の平坦な地形は低位段丘
(牛尾段丘)、手前は大井川。
居林①より南を望む。

写真2. 牧の原礫層
菅山原②



写真3. 御前崎台地
半島先端の方向(左)へ幾分高
くなっている。
遠渡③



写真4. 牧の原礫層の海浜成相
白羽④

写真5. 相良層群と古谷泥層の
不整合

相良層群の中に正断層があり、
不整合面上に基底礫岩が発達す
る。

比木⑤

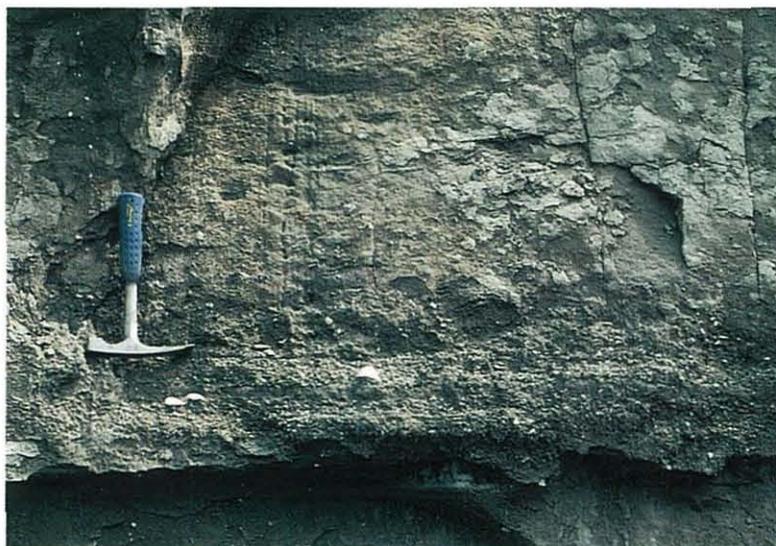


写真6. 古谷泥層
貝化石を多産する。
新田⑥